

まちなかアートでにぎわい創出



さかい たかあき
酒井 隆明
さきやま
篠山市長(兵庫県)



のむら まさひろ
野村 昌弘
りつどう
栗東市長(滋賀県)



たなか みきお
田中 幹夫
なんと
南砺市長(富山県)



せきぐち よしふみ
関口 芳史
とおかまち
十日町市長(新潟県)

司会・コーディネーター

ほそかわ たまお
細川 珠生

政治ジャーナリスト

文化芸術の持つ創造性を生かした地域振興やまちの活性化、にぎわい創出の取り組みが注目を集めています。文化・芸術の創造拠点の整備にとどまらず、アート感あふれる市街地の形成、市民を巻き込んだイベントの開催など、個性的な取り組みを行う都市も増えています。

今回の座談会では文化・芸術をまちづくりに活用し、成果を挙げている関口芳史・十日町市長、田中幹夫・南砺市長、野村昌弘・栗東市長、酒井隆明・篠山市長に、具体的な取り組み内容、市民を巻き込んで活動を展開するための秘けつ、今後の抱負などについてお話しいただきました。

(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)

作品を通じて自然を見る。
そして人と自然の
かかわり方を考える。
これが芸術祭の
コンセプトです。



関口 芳史
十日町市長(新潟県)

地域ならではの
個性的なアートイベントの開催

細川 近年は物質的な豊かさだけでなく、心の豊かさや日常生活の充実などを求める市民ニーズが高まっています。それに伴い、自治体の文化・芸術施策も、非常に重要性を増していることと思います。

そのような中、文化・芸術に親しむ機会を創出したり、積極的にまちづくりを活用し、交流人口の拡大をはじめとした地域活性化に結び付けることと思います。

世界的な版画家・棟方志功が戦中に疎開し、氏の作品が数多く残されている旧福光町では、記念館を開設するなど、まちづくりに生かされています。さらに、旧福野町では、平成3年から世界民俗音楽の祭典「スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド」を開催しています。

そのほか、平成20年からは、30人ほどが暮らす過疎集落の民家を、若い芸術家に開放し、作品を展示する「上島アート」を開催しています。実は私もこの住民ですが、都会から多くの芸術家が活動するにつれ、集落も活性化してくるなど、明らかに効果が出ています。

野村 栗東市では、平成11年に文化芸術の拠点施設として「栗東芸術文化会館ささら」を開催させて以来、市民の文化振興に力を尽くしてきました。その一つが、市民によるオリジナルミュージカル「ささら創造ミュージカル」の開催です。

出演は、すべて公募の市民ですが、みっちりレッスンを受けた上で、最終的には観客を集めて公演まで行う本格的なものです。

また、子どもたちの芸術教育にも熱心



平成3年から開催している世界民俗音楽の祭典「スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド」(南砺市)

ける都市も増えています。

本日は、アートに関する政策を進め、成果を挙げている都市にお集まりいただきました。それでは、まずはどのような取り組みを行っているのか、その内容についてお話し下さい。

関口 十日町市では、隣の津南町とともに平成12年から3年に1度、まちを挙げたアートイベント「大地の芸術祭」を開催しています。平成21年に開催した第4回展では、50日間に及ぶ期間中に、約760km²の広大な大地に365点もの現代アートの作品を設置し、芸術ファンをはじめ、多くの観光客が訪れ、まちは大いににぎわいました。現在は約200点を常設展示しています。

特徴は、中山間地域を舞台にしていることでしょう。近年は、衰退化・高齢化が著しく進行していますが、芸術祭が定着し、にぎわいが創出されるにつれて、明らかに活気を取り戻してきました。過疎化に悩んでいた集落の住民たちも、市外の人と交流を深めることで、地域に対する誇りを取り戻し、自信を深めているようです。

これとともに、十日町市が長年力を入れてきたのが、野外彫刻によるパブリックアート「十日町石彫シンポジウム」の開催です。毎年、彫刻家を市内に招き、3週間ほどかけて石彫作品を制作してもらい、完成された作品は、まちのさまざまな空間に設置されます。制作過程もすべて一般に公開しており、市民にとっては身近に芸術に触れる貴重な機会にもなっています。

もともとは、ある一人の彫刻家の熱意により、平成7年から始まったのですが、これまでに制作された作品は74点。貴重な文化資源と



に取り組んできました。平成17年には、東京交響楽団の指揮者で、世界のマエストロともいわれる秋山和慶さんを顧問に招き、ジュニアオーケストラ・アカデミーを開設しました。さらに、開校5年目の昨年は、そこで学んだメンバーを中心に「ささらジュニアオーケストラ」という楽団を結成しています。

ほかにも、東海道、中山道の旧街道が市内を走る地理的特性を生かして、朝の9時から夜の9時までの12時間、車両を通行止めしてまちづくりイベントを実施する「東海道ほっこりまつり」を開催したり、毎年10月は、市の景観にこだわる記念日として、「堂々!!りっとう景観記念日」を設け、栗東市ならではの景観の素晴らしさを市民ともども再確認する機会をつくるなど、市ならではの地域資源を活用したイベントも行っています。

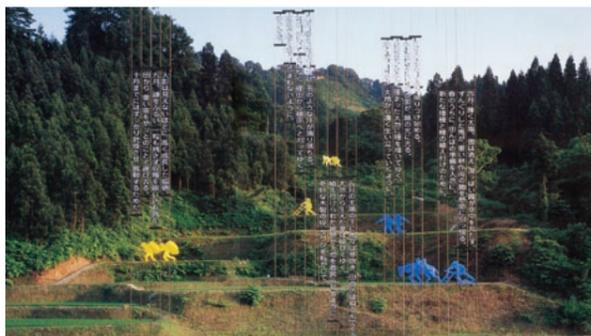
酒井 篠山市には、江戸時代の城下町「篠山市篠山伝統的建造物群保存地区」をはじめ、かつての宿場町の面影を残す街道沿いの町並み、自然豊かな農村集落、中世日本六古窯の丹波焼の里など、日本の原風景と言える豊かな資源に恵

して、多くの市民、観光客に憩いをもたらしています。

田中 南砺市は、平成16年に旧4町4村が合併して誕生した市です。合併後も、それぞれの地域に根付いた文化を継承し、新市の発展に結び付けているところに特徴があります。

その一つが、江戸期に端を発する、旧井波町の木彫文化です。古刹・瑞泉寺の門前町として栄えたこの地区には、今でも多くの彫刻工房が軒を連ねており、平成3年からは4年ごとに「国際木彫刻キャンプ」(現在名は「南砺市いなみ国際木彫刻キャンプ」)を開催しています。キャンプ中には世界各国から彫刻家を招き、作品を制作してもらうほか、関連イベントとしてまちなかにあふれる彫刻、木工芸、アート作品などを見て回る「寺のまちアートのいなみ」も実施しており、約20万人もの観光客が市内を訪れます。

さらに、演出家の鈴木忠志さんが30年以上にわたって活動の拠点としてきた旧利賀村では、昭和57年から「世界演劇祭」(現代名は世界演劇祭「利賀フェスティバル」)を開催しているほか、



「大地の芸術祭」の作品の一つ「棚田」(十日町市)

またれた都市です。現在、市ではこれらの資源を最大限に活用すべく、さまざまな取り組みを行っています。

保存地区の伝統的建造物を展示会場に、市ゆかりの芸術家の作品を展示発表する「まちなみアートフェスティバル」もその一つです。さらに、近年は代々受け継いできた雛人形を各所に展示する「丹波篠山ひなまつり」も行い、人気を博しています。

また、かつての街道沿いでは、あんどんなど、さまざまな明かりでライトアップする「宿場一夜夢街道」や、古い着物をのれんなどに仕立て直

昔ながらの生活様式を
再認識してもらうよう
促していくことも、
われわれの大切な
仕事です。



田中 幹夫
南砺市長(富山県)



酒井 隆明
篠山市長(兵庫県)

その土地に根付いた暮らしや文化そのものを、市外の方々に魅力的に見せていきたいですね。

改めて見つめ直すと、田舎の生活は非常に豊かです。どの家庭でも、朱塗りの立派な茶碗でご飯を食べたものですし、ゆったりとした贅沢な時間の中で、人間らしい暮らしを営んできました。経済が低迷している現在は、むしろ、この田舎の豊かさに改めて気付いてもらうチャンスではないでしょうか。この時期だからこそ、世界遺産「五箇山合掌造集落」をはじめとする南砺市ならではの昔ながらの生活様式を再認識してもらいたいし、そのように促していくことが、わ

れわれの大切な仕事だとも感じています。そのような中で、南砺市でも篠山市と同様、昨年「南砺里山博覧会」というイベントを開催しています。博覧会といっても、新たな施設などハードウェアはつくりません。住民たちが主体となって、「お味噌づくり」「自然体験」「野菜の収穫体験」「染物体験」など、集落ごとに企画した地域イベントを行っています。野村 私も人のつながりや、今日まで積み重ねられた伝統、まちの特性、そのようなものも、豊かさを構成する欠かせない要素だと思っています。栗東市でも、このような地域ならではの価値を取り戻そうという機運が醸成されてきました。先ほど紹介した、「東海道ほっこりまつり」の開催も、そのような市民の思いの延長上にあるのです。実際、市民の熱意・やる気は相当なものです。実行委員会として活動することはもちろん、中には、自分たちでNPO法人を設立し、主体的に歴史遺産を生かしてまちづくりなどに取り組みむケースも出てきています。

市外の人とのコミュニケーションが市民の理解を深める手がかり

細川 野村市長がおっしゃるように、文化芸術の取り組みを展開させる上で、市民の熱意、意識も重要な要素の一つでしょう。では、どのようにして、各都市では、市民の理解を深められたのか、その秘けつをお話してください。

関口 端的に言えば、市外の方に触れること、交流することが一番だと思います。今こそ、大地の芸術祭は、多くの住民が、アーティストやそのサポーターである学生たちと連携して活動

人との自然のかわり方をじっくり考えてもらうことを意識していただくわけです。酒井 芸術やアートというと、非常に難解なイメージがありますが、私はあまり堅苦しく考えていません。住民たちが楽しく活動し、篠山市に培われた文化を見つめ直すきっかけになればいい。その上で、土地に根付いた暮らしや文化そのものを、市外の方々に魅力的に見せていければ十分だと考えています。一言で言えば、「田舎ならではの豊かさ」のアピールということになるでしょう。実際、そのような考えから、平成21年には「丹波篠山築城400年祭」を開催しました。財政難の折ですから、十分な予算額を確保することはできませんでしたが、これを逆手にとって、これまでの市民の暮らしを「丹波篠山スタイル」として市民自ら発信するイベントにしました。

田中 私もライフスタイルも含めて田舎の豊かさをぜひ強調したいですね。振り返れば、経済が発展した戦後は、西洋的なライフスタイルが喧伝されるにつれ、田舎の生活様式は否定されてきた観があります。しかし、



ゆかりの芸術家の作品を展示する「まちなみアートフェスティバル」(篠山市)

田中 確かに「上島アート」一つとってもそれは明確だと思えます。これは集落自体を一つのキャンパスに見立てたインスタレーションという芸術活動ですが、これにより、住民たちに

して展示する「ひおき軒先ミュージアム」なども開催しています。ほかに、市内の限界集落の「丸山地区」では、空き家になった古民家を宿泊施設やフランス料理店に改造し、地域の人気の観光資源に生まれ変わらせる取り組みも行っています。

地域の文化的特性を生かし田舎の豊かさをアピールしたい

細川 さまざまな文化芸術の取り組みをご紹介いただきましたが、共通しているのは、それぞれまちの環境や、文化的特性を十分に生かしていることですね。お話を聞きまして、うまく地域の資源とアートを融合させていることが分かりました。各都市の施策が、多くの人に受け入れられているのも、そのあたりに理由がありそうですねが、いかがでしょうか。



市民によるオリジナルミュージカル「さくら創造ミュージカル」を開催(栗東市)

とって何気ない風景が、まさにここでしか見られない貴重な作品として演出され、大いに魅力を増しています。関口 「大地の芸術祭」の作品群も、同じような効果を狙っています。見慣れたまちの自然が現代アートと組み合わせられることによって、明らかにいつもとは違った表情を見せるから不思議です。実は、このイベントは、当初から「人間は自然に内包される」というコンセプトを中心に据えていました。要は、芸術を通じて越後妻有地域(十日町市・津南町)の自然を見る。そして、



人のつながりや伝統、まちの特性も、豊かさを構成する欠かせない要素でしょう。

野村 昌弘
栗東市長(滋賀県)

田中 私もライフスタイルも含めて田舎の豊かさをぜひ強調したいですね。振り返れば、経済が発展した戦後は、西洋的なライフスタイルが喧伝されるにつれ、田舎の生活様式は否定されてきた観があります。しかし、





細川 珠生
(政治ジャーナリスト)

によいまちをつくろうと、まちづくり活動にも積極的に参加するようになっていったのです。**酒井** 地域資源も、われわれにとっては見慣れたものですから、それがどれだけの価値を持っているか、よく分かりません。その点、外からの指摘は非常にありがたいですね。その意味でわが市のキーマンは前副市長でした。市外の人間として、客観的にまちのよさを発見し、古民家の改修など、政策に生かしてくれました。また人脈も豊富で、多くの関係者が市を訪れ、篠山市の素晴らしさを指摘してくれたものです。**野村** 栗東市では、市外の方との交流を深め、まちづくりを行う組織として「栗東市街道百年ファンクラブ」を立ち上げています。会員の中には、市外の大学の先生や学生たちも少なくありませんが、彼らは、私たちには思いもよらないところに光を当てて、新しい発想で活性化に取り組んでくださっています。私たちも大いに刺激を受けていますね。

**これまでの活動を土台に
これからの展望を開く**

細川 それでは最後の質問です。これまでの活

動を生かして、各都市では、どのように活動を発展させていきたいか、今後の展望をお話してください。

関口 これまでの文化活動を土台に、さらに活性化に結び付けたいですね。その一つとして現在進めているのが、ブランド戦略です。「大地の芸術祭の里／芸術の街」十日町・越後妻有」というブランド力をつくり上げていきたい。実際、大地の芸術祭の関連でデザイナーをWEB上で公募し、オリジナルのデザインロゴを制作したり、販売戦略に生かしたりしています。このようなデザインの力を活用した取り組みも併せて推進していきたいと思っています。

田中 私もまちの看板なども含めて、地域の景観や文化に即した統一感のある「サイン」づくりは、とても重要だと考えています。実際、木彫が盛んな旧井波町では、職人手づくりの看板やバス停が制作され、話題を呼んでいます。また、越中の小京都といわれる城端では、「歴史と文化の香るまちづくり」を進めています。このような取り組みも、ブランディングの一つとして、地域と連携しながら進めていきたいと思っています。

野村 文化政策が効果を挙げるためには、まちの資源を生かすことが何よりも大切です。栗東市といえば、JRAのトレーニングセンターがありますから、これまでの取り組みに加えて、馬の要素も関連づけた事業を行っていききたいですね。

酒井 篠山市では、平成21年に、これまでの活動が評価され、文化庁から文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）を受けました。大きな励みになりましたが、国からの表彰に満足せず、今度は世界に認められるように、さらに努力し

ていきます。

細川 アートというと、特殊な分野ととらえられがちですが、本日お話を聞きまして、まちづくり活動とも関連深い取り組みであることが分かりました。とりわけ印象に残ったのは、いずれの都市も、長年培われてきた地域の生活文化をベースに活動を進めていたことです。地域の文化力を生かしながら、住民を巻き込んだ、個人的なまちづくりに発展させているところに、これまでにない新しさを感じた次第です。

これからも、地域ならではの文化を大切に、さらにまちの発展に生かすとともに、次世代にもしっかり継承してもらいたいと願っています。本日は、長時間にわたり、ありがとうございました。

(平成23年6月7日、日本都市センターにて実施)

本コーナーは隔月掲載となります。次回は9月号に掲載予定です。

